

コリント人への手紙第一8章 「偶像に献げた肉」

1A 知識にまさる愛 1-3

2A 人々の知識 4-8

1B 存在しない神々 4-6

2B 偶像への慣れ親しみ 7-8

3A つまずきの罪 9-13

1B 知識によるつまずき 9-10

2B キリストに対する罪 11-13

本文

コリント人への手紙第一の 8 章を見ていきます。パウロは、コリントの教会にある問題に対して対処していますが、1章から6章までは、人から伝え聞いた話に対して答えています。7章から、彼ら手紙の中から受け取った手紙にある内容に返答をしていっています。7章は、結婚についてでした。そして8章は、偶像礼拝についてです。8章そして10章で、パウロは、コリントや、他のローマの町々にある日常の、偶像礼拝の問題について話していきます。

午前礼拝でもお話ししましたが、聖書全体において、主は、「あなたがたは、わたしこそが神であることを知りなさい。」というメッセージに満ちています。神が天地を創造されましたが、これを書いているモーセは、神々がいっぱいになっているエジプトで生まれ育ち、他のイスラエル人たちもそうでした。偶像礼拝は、人々が、「生めよ、増えよ、地を満たせ」と神が命じられたのに、天にまで届く塔を建てようとして、天体の太陽や星々を拝むところから始まっています。被造物にしかすぎないものを拝み、また、木や石、金銀で像を造ってそれを拝み、仕えます。

そこで神は、偶像でいっぱいだったエジプトから連れ出したイスラエルの民に対して、二つの戒めを与えられました。「出エ 20:3-5a あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。4 あなたは自分のために偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造ってはならない。5a それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、ねたみの神。」ここで、ご自身を「ねたみの神」と呼ばれているところが興味深いです。神が嫉妬する？その通りです。神は、私たちをこよなく愛しておられます。ご自身と契約という形で愛の結びつきを持ちたいと願われています。ご自身を夫とし、ご自分の民を妻と呼び、誓約を結ばせています。

このような真剣な、人格と契約の中にある愛です。感情ももちろん、そこには含まれていますが、結婚生活、夫婦生活が単なるその時の気分で結びついているのではないことは、誰もが知ってい

ます。ですから、他の男あるいは女に行ったら、自分は激しい嫉妬を抱きます。これは当たり前のことです。いわゆる妬みの罪とは違います。君は他の女、男と付き合っているんだよ、私は寛容な人間なんだ、とならないですよ？これが、神が偶像礼拝を禁じている理由です。

ところで、どこに行っても、何をしても、夫婦は夫婦ですね。時と場合によって夫を変えたり、妻を変えたりしません。けれども、神々と呼ばれる偶像は、その土地、またその土地の人々にあがめられています。今もそうですが、特に当時は、それぞれの民の神がいて、郷に入っては郷に従えということわざがあるように、その神を敬うのです。だから、エジプトから出てきたイスラエルの民が、約束の地に入って陥ってしまうであろう罪は、まさにこれでした。カナン人の地に入りますから、今度はカナン人や周囲の民の神々に仕えようと思うわけです。バアルやアシェル、アシュタロテ、またケモシュやモレクです。それで、神は厳しく、それらの神々に仕えてはならないと戒められました。神については、愛による契約、誓約によって信じているのです。したがって、ところ変われば神も変わるのではなく、どこに行っても、唯一の神、そして唯一の主イエス・キリストです。

相手に合わせる事が美德とされる日本人の文化では、キリストへの信仰でこの部分が挑戦になりますね。教会にいれば、自分はイエス様を信じています！と言えますが、自分の家に戻れば、そこには檀家の仏壇があります。そしてお墓があり、そこではお線香を立てないといけませんが、先祖の霊を慰めるためです。そこでは仏様を敬わないといけない、ご先祖様を敬わないといけない、目に見えない声が響いていますね。けれども、私のアドバイスは次の通りです。「しっかりと、イエス様を愛してください。イエス様との関係が成熟すれば、どのようにして未信者の家族や地域の人々を敬えばよいか、分かってきます。」ということです。イエス様を取るか、家族や地域の人々のどちらを取るか？ではなく、イエス様を思いっきり取れば、あとは神が何とかしてくださいます。そして、周囲の人々にどのように敬い、接していくことができるのかが知恵が与えられます。

1A 知識にまさる愛 1-3

では前置きはこの位にして、本文に入ります。

¹ 次に、偶像に献げた肉についてですが、「私たちはみな知識を持っている」ということは分かっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。

午前礼拝で背景を説明しました。ギリシア文化を持っているローマ社会では、神々があちらこちらにありました。ギリシア神話の神々、ローマ神話の神々です。アテネで偶像がいっぱいなのをパウロが見て、熱情を抱いたのを、私たちは使徒 17 章で読みました。そして、偶像の宮があちらこちらにありますが、そこでは肉が供え物の一つとして献げます。そして、その肉を食べることによって、その神と交わることになります。イスラエルの神、まことの神も、交わりのいけにえを献げるようにイスラエル人に命じ、祭壇で牛や羊を火で焼いて、その一部を民が食べることによって礼拝し

ます。共に食することで、同じものが体に入るので交わるのです。

しかし、コリントの教会の人々には、その偶像礼拝に関わっている人々がいました。それは、ある知識に基づくものでした。「神は唯一のお方で、神々と呼ばれているものは存在しない。」ということです。だから、それは肉にしかすぎず、食べたところで自分の身を汚すようなことにもならない、といった知識だったのです。日本であれば、仏壇へのお供え物をしたところで、その仏壇には何も無い。またお墓にも先祖がいるわけでもなく、線香を焚いたところで何の問題もない。葬式でも、焼香を焚いても、お写真が飾られてそこで祈っても、何の問題もない。そこにあるのは、単なる物であり、私がしていることは問題ないのだ、ということです。

これは、一部正しくて、一部間違っています。一部正しいというのは、確かに唯一の神のみがおられて、神々というものは存在しないという知識においては間違えていないのです。パウロは、8章においては、彼らの知識は正しいことをまず述べます。けれども、思いっきり間違っています。偶像は単なる木、石であります。人が礼拝を献げる時に、そこに悪霊が働きます。サタンや悪霊という存在、偶像礼拝との関わりについて、コリントの人たちは無知でした。そのことについて、パウロは10章で述べます。ここ8章では、また別の問題を取り上げます。彼らが知識で奢っていたので、他の兄弟たちをつまづかせていたという問題です。

² 自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。

いわゆるギリシアの哲学者が言っていた、「無知の知」に似たことを、パウロもここで言っていますね。私たち人は、自分がすべてを知っていると思った時点で、本当は知っていないとおかしいことさえも、まだ知っていないのだということを良くわきまえないといけません。

ユダヤ人の指導者たちがイエス様について言っていることを思い出してみてください。イエス様を、ユダヤ人の民衆の多くが信じ始めました。それで指導者が、サンヘドリンでこう言います。「ヨハ 7:48-49 議員やパリサイ人の中で、だれかイエスを信じた者がいたか。それにしても、律法を知らないこの群衆はのろわれている。」律法を知らないから呪われている、とまで言っています。自分は知っているということですね。けれども、議員の中にニコデモという人がいて、彼は隠れ信者になっていたのです。そこでニコデモが、「ヨハ 7:51 私たちの律法は、まず本人から話を聞き、その人が何をしているのかを知ったうえでなければ、さばくことをしないのではないか。」と言いました。すると、彼らは答えて言うのです。「7:52 あなたもガリラヤの出なのか。よく調べなさい。ガリラヤから預言者は起こらないことが分かるだろう。」あんな、彼らは自分が知っているとうぬぼれていたから、分からなければいけないことに目が閉じられていました。イザヤ書9章のメシア預言に、しっかりとメシアがガリラヤから出ることを教えています(9:1-2)。

聖書の言っている知識は、あくまでも関係における知識です。神がご自分のものになった者たちを愛し、示しておられることがあります。それを知って、私たちは神を信じ、この方の言われることに聞き従います。モーセがイスラエル民に言いました。「申 29:29 隠されていることは、私たちの神、【主】のものである。しかし現されたことは永遠に私たちと私たちの子孫のものであり、それは私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。」神は、ご自分の民に対する愛のゆえ、敢えてご自分のことを隠されることがあります。これは父と子の関係を思えば、あまりにも当たり前ですね。お父さんが、幼い息子に自分のしていることのすべてを話すわけではありません。自分の仕事のことを、話しませんね。話す時は、息子に何かを教えたいとき、そこから学ぶことができることなら、話すでしょう。それと同じです。子を愛するから、話します。けれども、子に語られない時は、ご自身にただ信頼してほしいから、そうされているのです。そこでこう言っているのです。

³しかし、だれかが神を愛するなら、その人は神に知られています。

興味深いのは、神を愛するなら、神を知っていると書いておらず、「神に知られています。」と書いていることです。神に愛され、選ばれている人は、神を愛します。自分の身に何が起きているのか分からないことが多くあります。しかし、神が何か良いことを行われていることは、信じて、分かっています。そこで、自分自身は分からないけれども、神には知られている、分かっているということが起こります。渦中にいる本人はがむしゃらです。ただ、主を信じて、試練を耐えて、従っているだけかもしれません。けれども、そこに主がおられると、周りの人々は認めることができる確かさを持っています。証しを持っています。私は、こういう証しが好きです。自分には分からないことが起こります。けれども、自分は信じます。すると、その人に神がおられることを他の人たちが見て、慰められるのです。自分には知識は与えられていないけれども、神の知識が自分を通して人々に知れ渡るのです。つい先週も、ある兄弟が、自分の奥さんが精神的に病んでいることを証してくれました。けれども、「神は、すべてのことを相働かせて、益としてくださる。」と何度も言っていました。このことを、同じような試練を通っている人々が聞いたら、どれほど慰められることでしょうか。神を愛するなら、神に知られているのです。

2A 人々の知識 4-8

パウロは、1 節で「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」と言っていますね。4 節から 6 節で、彼らの知識について話します。7 節以降で、愛によって人を育てることについて話します。

1B 存在しない神々 4-6

⁴さて、偶像に献げた肉を食べることについてですが、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」ことを私たちは知っています。⁵ というのは、多くの神々や多くの主があるとされているように、たとえ、神々と呼ばれるものが天にも地にもあったとしても、⁶ 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至

るからです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。

4節で鍵括弧に入っているのが、彼らが手紙の中で書いてきたことなのでしょう。「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」という言葉です。パウロは、彼らの知識に間違いのないこと、それが正しいことを補足して述べています。神々と呼ばれているものがあったとしても、父なる神が唯一おられるだけです。そして主も、イエス・キリストのみなのだということです。イエス様は、わたしが道であり、真理であり、いのちなのだと言われました。イエスが一つの道ではなく、この方が道であり、主なる方は唯一です。

父なる神のことについて、「この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。」とパウロは言っていますが、いわゆる神々と呼ばれているものと、唯一の神との違いです。神は、すべてを支配している主権者です。世界には悪があり、サタンが支配しています。しかし、その闇の力でさえ、神の許しなしには何も動くことができないのです。悪をさえ、神の主権の中にあります。悪魔は神に反対していますが、神の手中にあり、究極的には神の目的に仕えているのです。

2B 偶像への慣れ親しみ 7-8

⁷しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんできたため、偶像に献げられた肉として食べて、その弱い良心が汚されてしまいます。

パウロは、知識から、愛による育て上げの話にうつします。その知識を必ずしも、信じている人のすべてが共有しているわけではないのです。偶像になじんできた人が神を知り、イエス様を信じたら、その過去のことを思い出すようなものに触れるだけでも、偶像礼拝をしてきたことを思い出ししてしまうのです。

興味深いことがあります。クリスチャン家庭で育った方はこの中におられるでしょうか？神社仏閣、神棚や仏壇、地蔵、お守りなどに対する見方が、大きく変わります。クリスチャンの家族で育った人は、神社や寺で礼拝行為をしたことがないので、そういったものが単なる物体にしか思えないそうです。祠を見ても、その裏はどうなっているのか？というようなことが気になって、箱にしか見えないそうです。

覚えているのは、教会の夏の合同キャンプで、お守りのことを話していましたが、お守りがテーブルの上に置かれているとすると、牧師の子供たちは、何にも感じないことを話しましたが、牧師の奥さんが、「あるだけで、生理的な拒否反応が起こる」と言っていました。私も、このタイプです。今はだいぶ減りましたが、信仰生活が若かった時は敏感でした。ある時、石段を上がっていて「こら辺で変な気配がする」と思ったら、横に石柱がありました。文字が刻まれています。神社に通

じる石柱だったのです。以前、流行ったアニメ映画「千と千尋」を見たら、途中で文字通り気持ち悪くなりました。クリスチャンになってからも、神社の境内で遊んでいるような夢を見ていましたから。原風景になっていて、身体に沁みついてしまっているからです。これが、「その弱い良心が汚されてしまいます」ということです。

⁸しかし、私たちが神の御前に立たせるのは食物ではありません。食べなくても損にならないし、食べても得になりません。

パウロは、大事なことを話していますね。食物そのものが、その人を汚すことはないのです。このこと。つまり、ある食物が汚れているとして拒否させて、禁じることは、を教えるのは、偽りの教えだとして、テモテ第一 4 章でこう言っています。「I テモ 4:3-5 彼らは結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人々が感謝して受けるように、神が造られたものです。4 神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何もありません。5 神のことばと祈りによって、聖なるものとされるからです。」食べ物そのものが、自分を汚すことはないのです。これは、健康志向の今、語られなければいけませんね。また、菜食主義、ベジタリアンについて、聖書は良いとも悪いとも言っていません。しかし、このことをすれば何か霊的に清められるとか、反対に悪いものに影響されるとか言ったら、問題です。神の前で立たせるのは、食物ではないからです。

3A つまづきの罪 9-13

では、一体、何が問題なのか？それは、その肉を食べる、食べないということではなく、兄弟との関係です。

1B 知識によるつまづき 9-10

⁹ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまづきとならないように気をつけなさい。¹⁰知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、その人はそれに後押しされて、その良心は弱いのに、偶像の神に献げた肉を食べるようにならないでしょうか。

午前礼拝でお話したことを思い出してください。信仰をもって、まずしなければいけないことは、「自分がキリストの内にいることをしっかり確認する」ことです。「コロ 2:6-7 このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。7 キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりに信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。」私がクリスチャンになって、教会で礼拝を献げますが、何か他の人たちのように奉仕しないといけなかな？と焦りました。けれども、「まず、自分の罪が赦されたことに確信を持つことなのだ。」とヨハネ第一の手紙を読んで気づきましたし、自分がキリストにあって喜んでいる、感謝していることが、自分の奉仕の務めだと分かったのです。

それから成長すると、キリストを仰ぎ見るのが関心事になりました。自分は抑うつ傾向がありました。自殺願望もありました。どうしたら自分が治るか？と書いていたのですが、ある時にこう決めたのです。「自分のことなんかどうでもよい、聖書にも、虫けらとイスラエルを神が呼ばれているのではないか。こんなカスはカスのままでいい。そんな姿の中から、主よ、あなたの栄光を現してください。」と祈りました。すると、その抑うつ症状がなくなったのです！自分を救おうとするとそれを失い、キリストと福音のために失うと、それを救うという御言葉を思い出しました。それから、俄然、聖書を読んで、神のご計画、キリスト働きを見ることが楽しくなりました。

そんな時に、アメリカに渡っています。牧会学校で学びました。聖書をじっくりと見ることが出来ました。幸せでした。牧者チャック・スミスの聖書講解の説教を創世記から黙示録まで聞くことが必須でした。私は聞きまわって、卒業する半年前にすべて終わらせました。卒業して引っ越す時、そのテープを聞いていたところでひざまずき、涙を流して神に祈りを献げたことを思い出します。

しかし、神の知識、神への愛を得た私ですが、神のみこころはそれ以上のものだったのです。それは、福音を伝え、またみことばを伝えていく人々への関心でした。イエス様は、この人々を愛され、ご自分のいのちを捨てられました。そのことを知る必要があります。神を知り、神を愛し、その愛に満たされたら、次はその愛を兄弟たちに分かち合い、また人々に伝えていくのです。これまでは、神は教会にしかないと思いました。世は神に敵対しているから、神はおられないと思っていたのだと思います。そこから、すべてのところに神がおられると分かりました。まだ神を知らない、キリストを知らない人々のところにも、神がおられると分かりました。それから、肩の荷が降ろされました。クリスチャンではない方々と一緒にいることが楽しくなりました。もちろん、そこでは世の話がいっぱいです。けれども、その世を造られ、愛されているのは私の神です。その話の中に、神を知るためのきっかけは、無尽蔵にあるのです。

このように、三つの段階を経ています。神に愛されていることを初めに知ること。次に、神を愛することを知ること。そして次に、神の愛をもって人々を愛することです。

けれども、もしここで、神を知ること、神の知識だけで留まっていたらどうなるでしょうか？自分が知識を持っているから、人々はその知識を持っていないので、相手を黙らせることができます。説得ができます。正論を言えますから、人々は付いてくるしかありません。フォロアーが増えます。自分はいわば「権利」を持っているのです。自由を持ち、力を持っているのです。そのまま知識、自由や権利を得て動いていけば、それは周りの人々をつまづかせる武器となってしまうのです。

それは、自分が知識を持って自由を得ていけば、他の弱い兄弟たちは、それに動かされていくようになるという影響があるということです。自分のしていることによって、ここでは、肉を食べるようにしてしまいます。自分は単なる肉だと思っているかもしれませんが、その兄弟はまことの神で

はなく、偶像に仕えていると思って食べているのです。

ローマ 14 章でも、信仰の弱い人と強い人の間で、兄弟をつまずかせている問題をパウロが取り上げています。「14:15 もし、食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているなら、あなたはもはや愛によって歩んではいけません。キリストが代わりに死んでくださった、そのような人を、あなたの食べ物の中で滅ぼさないでください。」ここでは、心を痛めるという反応が出ています。心を痛める、傷つくという反応もあります。ここ、コリント人への手紙では、心を痛めるのではなく、その人自身も同じことをやってしまうということです。どちらについても、その人が信仰から離れてしまうという力を持っていることでは同じです。心を痛める人は、怒り、失望して、神への祈りをやめてしまい、教会からも離れてしまうような危険があるでしょう。同じことをしてしまう人は、明らかに罪を犯しているのです、まことの神から離れ、偶像礼拝の生活に戻ってしまうことです。

2B キリストに対する罪 11-13

コリントの人たちが知らなかったのは、知識というものが、愛によるものだということです。

¹¹ つまり、その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります。この兄弟のためにも、キリストは死んでくださったのです。¹² あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。

パウロが、ここで「兄弟」という言葉を繰り返し使っています。コリントの人たちが見失っていたのは、教会の人々が神の家族だということです。兄弟なのだという愛の関係の中で、知識を用いないといけないうことです。兄弟を滅ぼすことは、すなわちその兄弟のためにいのちを捨てられたキリストご自身に罪を犯していることになるのです。問題は、その肉が汚れているのかどうかということではないのです。その肉を食べる時の良心が汚されるということです。自分は汚れていないのですが、自分の自由なふるまいによって、兄弟の良心が汚されているということです。自分は罪を犯していない、ということではないのです。犯しているのです、兄弟をつまずかせたということによって、です。

¹³ ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。

パウロにとって、自分自身が肉を食べることについては自由があることを知っています。他の箇所では、ある食物を禁じる教えは、悪霊からのものだとして断じています。しかし、彼にとってのもっぱらの関心事は、兄弟だったのです。愛によって人を育て上げることだったのです。信仰の歩みの助けをするために、知識を用いますが、その逆のこと、つまずかせることになるのであれば、彼は自分の自由をむしろ、肉を食べないということを用いたのです。食物を食べることも、食べないこと

も自由なのですが、兄弟のゆえに食べないことにしました。

パウロは、ガラテヤ書でも話しました。「ガラ 5:13 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。」自由を得たのですが、その自由を愛をもって仕えるために用いました。自由を捨てることではなく、むしろその自由を用いて、しもべの姿勢を取ったのです。次回 9 章で、パウロは自由について、話していきます。「自分はだれに対しても自由ですが、すべての人の奴隷になりました。」と言いました(9:19 参照)。

私たちは、このように聖書をじっくりと学んでいく教会です。けれども、その知識を得ることが目的なのではありません。こうやって、自分自身が正され、愛によって建て上げられ、神を愛し、兄弟を愛する、その結びつきが深まるためです。与えられた知識を、御霊によって実践に移す時に、そこで初めて真の知識に至ります。